

## 時過ぎて60年―旅と山と教室で出会った人たち―② 大西清見

### 恩師と友の一冊の本 (続)

その後の私に大きな影響を与えてくれたのが、同じ村の同級生から借りた一冊の本でした。その本とは、小学生版のシュリーマン自伝『古代への情熱』で、一息に読んで感動を受けた記憶があります。この本こそ、私を本格的に読書と、そしてその後の旅の世界に導いてくれた本でした。

ドイツ人・シュリーマンは、8歳の時、父親からクリスマスプレゼントとして『子どものための世界史』という本を贈ってもらいました。その書物に神話・伝説上の戦争として有名なトロヤ戦争の1枚の挿絵がありました。トロヤの勇士・エーネアスが父を背負い、幼児の手を引いて落ちのびて行く場面です。そのトロヤ落城の挿絵に感動を受けたシュリーマンは、ホメロスの詩は事実をうたったものだ信じ、トロヤ発掘を決意し、生涯その実現のために情熱を傾けたのです。

少年時代、私はこの本を読んで大きな衝撃を受けました。シュリーマンが生涯を、そして全財産をかけて発掘したトロヤの遺跡をすぐにでも訪れてみたいほどの衝撃でした。このトロヤへの憧れは、大学生になって2年後にユーラシア大陸一周の旅として実現したのです。

### 大学学生寮の友とユーラシア大陸一周の旅

大学に進んで大学の学生寮に入りました。学生寮は老朽化した木造の寮でしたが、寮生活や先輩・同級生との環境は今までにない私の世界で、私が更に飛躍していくことの刺激をいっぱいいただきました。なかでも同僚の法学部生で山岳部のMが、いつもヒマラヤ登山や日本の政治への夢を語ってくれていたことが、小さな私を更に大きな私へと導いてくれたのです。毎週のように山や岩へトレーニングに行く彼の目は、決してホラを吹いているのではなく、語るたびに更はずっと先を読んでいるような輝いた目であったことは、いま現在、日本の政治や経済の世界でも最前線で活躍されていることから間違いなかったと考えています。

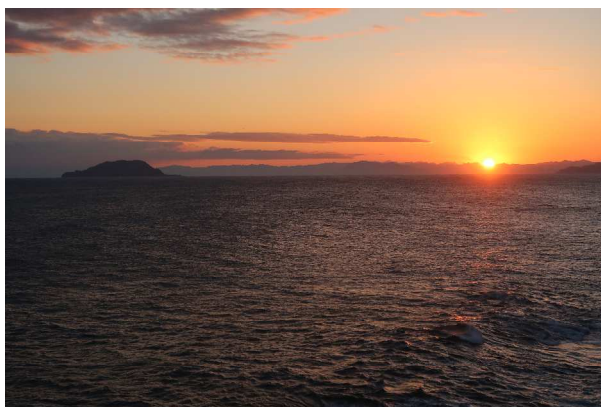
私は大学2回生を終え一年間のユーラシア大陸一周の旅に出ました。目的の一つはトルコのトロヤの遺跡を訪ねることと、今まで学んだ「世界のこと」も確かめてみたということでした。そして、ヨーロッパ大陸はすべてテントを担いでヒッチハイクで踏破したいと。しかし、当時は海外の情報がほとんどなく、また海外旅行約6万人という時代ですから、かなりの勇気と決断がいったことは言うまでもありません。

ユーラシア大陸一周の旅、往路は横浜港～ソ連・ナホトカ～モスクワ～レニングラード(現、サンクトペテルブルク)～ヘルシンキ～ストックホルム。ストックホルムで約二ヶ月のアルバイトを経て北欧・西欧をヒッチハイクで回り、ギリシャからはトルコ、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インドなどバス・鉄道を乗り

継いで翌年の2月に鹿児島港に帰ってきたのでした。この旅の出発の前夜、ヨーロッパへの旅をMに告げると、酔って寝ていたMはただ笑顔で無言の握手だけをくれたのです。そして、翌日の東京に向かう新幹線の中で、私に電話の呼び出しがありました。その電話は前夜握手をしたMで、「頑張って行って来い。俺もいつかヒマラヤに行くからな」という簡単な電話でした。(続)

注：Mはその後、厳しい冬の北鎌尾根などのトレーニングを積んで、1972年6月、北米最高峰マッキンリー（現デナリ、6194m）に登頂した。

### ◇編集後記◇



2019.1.1 伊根町新井崎からの初日の出  
若狭湾の彼方・敦賀方面を望む

明けましておめでとうございます。2019年の最初の編集後記です。今年も『大阪労山ニュース』を、連盟機関誌部全員で頑張って編集、発行していきたいと思えます。どうぞよろしくお祈りします。年末年始は私の実家・伊根町（京都府）に帰省、新しい年も早起きをして伊根町新井崎の岬から初日の出を迎えました。天候は晴れ、若狭湾の彼方の敦賀方面からのご来光でした。左に見える島はオオミズナギドリで有名な冠島。更に北東に目を移すと越前岬が遠望できます。今年も時々帰省をして美しい海、岬、島と故郷の自然に向き合っていきたいと思えます。（大西）

\*\*\*\*\*  
今月も各会より会報を送っていただきました。

安治川山の会ニュース（安治川山の会）、やまなかま（泉州労山）、きたろうニュース（きたろうHC）、にしよど（西淀労山）、ぽんぽん山（高槻）、奈良県連ニュース滋賀県連ニュース、福岡県連通信、労山おかやま、やまと友の会、HCかざぐるま、京都労山、噴煙（鹿児島労山）、兵庫労山会報、県連ニュース（和歌山労山）

発行日 2019年（平成31年）1月21日 No.396

編集・発行 入澤、大西秀、笠井、園、高橋、中井、中尾、服部、大西清

\*\*\*\*\*